

健康関連記事（新聞・雑誌など）

多胎妊娠一胚の数抑え負担軽減を 「いのち」の未来<5>

（中国新聞 H19年6月23日土曜）

精子と卵子を扱う生殖補助医療の現場には、双子以上の「多胎妊娠」が多いという課題がある。体外受精後、子宮に戻す胚（受精卵が細胞分裂した初期段階）の数が影響しており、多胎妊娠になると母体や胎児にかかる負担は小さくない。広島市南区、県立広島病院生殖医療科の原鐵晃医師（53）は「妊婦に戻す胚の数をできるだけ減らすことが大切だ」と話す。（串信考）

—なぜ体外受精で多胎妊娠が多いのですか。

体外受精は、妻の体から卵子を採取して夫の精子と体外で受精させ、培養した胚を妻の子宮に移植する技術。妊娠率を上げるため、一度に胚を2つ、3つと移植すれば双子、3つ子が生まれる確率は当然高くなる。

体外受精・胚移植による多胎妊娠率は全国で15－20%。自然妊娠で多胎になる確率の約1%に比べ、非常に高い。多胎妊娠は母体や胎児への負担が無視できないので、できるだけ、その割合を下げようというのが日本生殖医学会などの認識になっている。

—そのため何をする必要がありますか。

子宮に戻す胚の数をできるだけ減らさなくてはいけない。私はで

きるだけ一個にして、多胎率を下げ、自然妊娠の割合に近づけるのを目標にしている。それを実現するには、胚の培養や凍結など関連する技術の質を高めなければいけない。

たとえば、良好な状態の胚が3つあった場合、1個を戻すと胚の質には差がないことを十分理解してもらい、2つの胚は凍結保存し、最初の移植で妊娠できなかった時、あらためて1つずつ移植するよう勧めている。

—子供はどれぐらい生まれていますか。

国内で体外受精による出生数は2004年度、約1万8千人で全出生数の約1.6%にあたる。体外受精で誕生した子供は、身体的、精神的な発育の面で自然妊娠による子供にくらべ、大きな違いはないと報告されている。1978年に世界で初めて体外受精で誕生した英国の女性は昨年12月、自然妊娠で子供を出産している。

—夫の死後、凍結精子で子供が生まれ、裁判になった例がありますね。

がんを抑えるために抗がん剤治療や放射線治療を受けると生殖機能を損なうリスクがある。そうした治療に入る前に精子や卵子、胚の凍結保存ができていれば、患者の心のささえにもなる。

凍結された精子などを使って生殖補助医療をする場合には、その男女が婚姻関係にあるか、どちらか一方が死亡していないか、とい

うことを確認しておくことが大切で、私は治療に入る前、患者から戸籍謄本の提出を求めている。

—日本産科婦人科学会に体外受精・胚移植は婚姻中の夫婦に限って認めるとの会告があります。

生殖補助医療は、家族を形成したいという患者夫婦の思いにこたえる医療だと私は思っている。もちろん家族にはいろいろな形態があるし、外国では事実婚でも体外受精を認める例がある。日本産科婦人科学会の会告では、体外受精は、それ以外の方法では子どもが望めない夫婦のための医療となっている。

生殖補助医療に対する公的な規制は米国では緩やかだが、ヨーロッパでは厳しい国もあり、グローバルな基準はない。それぞれの国で歴史的、文化的、宗教的な背景を踏まえて議論する必要があると思う。(県立広島病院産婦人科。H19年9月より生殖医療科開設予定)